

特別講演

未来の理学療法のために今できること — デジタル理学療法と遠隔リハビリテーションの 最新知見と実装戦略 —



順天堂大学 保健医療学部
理学療法学科 学科長

高橋 哲也（たかはし てつや）

【略歴】

学歴

平成元年3月 国立仙台病院附属リハビリテーション学院理学療法学科卒業
平成13年3月 （オーストラリア）カーティン大学大学院理学療法研究科（修士）
平成16年3月 広島大学大学院医学系研究科保健学専攻（博士）

職歴

聖マリアンナ医科大学病院、石岡循環器脳神経外科病院、群馬県立心臓血管センターで
臨床経験を積み、兵庫医療大学、東京工科大学を経て、
平成30年4月～ 順天堂大学保健医療学部理学療法学科 教授
順天堂大学医学部附属順天堂医院リハビリテーション室室長補佐（併任）

主な役職：

平成18年7月～現在 日本心臓リハビリテーション学会、理事（平成22年7月～副理事長）
平成27年6月～現在 日本理学療法士協会 理事（令和7年6月～副会長）
令和2年3月～現在 日本集中治療医学会 理事（現在に至る）
令和3年4月～現在 日本循環器理学療法学会 理事（令和4年4月～副理事長）

主な認定資格

日本心臓病学会 FJCC, 日本心臓リハビリ学会認定上級指導士, 心不全療養指導士、
専門理学療法士（循環）、集中治療理学療法士

【抄録】

2025 年には、わが国の総人口の約 30%が 65 歳以上となり、医療・介護需要はピークを迎える。富山県も例外ではなく、過疎地域と都市部の二極化、高齢者単身世帯の増加、複数の慢性疾患が重複する患者の増加などにより、リハビリテーションの提供体制は抜本的な見直しを迫られている。

こうした社会課題を克服する鍵は、理学療法士が従来の「徒手・対面」中心モデルを超え、テクノロジーを活用して場所・時間・職種の壁を越える新たな価値を創出できるかどうかにかかっている。

本講演では、AI による運動解析、ウェアラブルデバイスによる遠隔モニタリング、バイオセンサを用いたエネルギー代謝推計など、デジタル技術が理学療法の評価・介入を変革しつつある最前線を概説する。さらに、触診で得られる質的情報とデジタルデータを統合した「ハイブリッド理学療法」の可能性を探る。特に私自身が積極的に参画する遠隔心臓リハビリテーションの現状について、国際的な潮流や国内でのバリアなど最新知見や実装戦略について解説する。

デジタル化の対象は臨床活動にとどまらない。この度、日本理学療法士協会副会長として協会の DX および AI 推進啓発を担当することになった。14 万人超の会員を抱える協会の DX 中長期戦略について、理学療法グランドデザインとの整合を図りながら年度 KPI を公開し事業運営の透明性を担保しなければならない。

具体的には、

1. 会員管理システムの高度化、
 2. 生涯学習へのデジタル理学療法教育の組み込みと中高年理学療法士のリスクリング支援、
 3. 遠隔リハ機器の安全性・有効性を評価する技術適正ガイドラインの策定、
 4. 全国レベルの標準データベース整備と費用対効果分析、
 5. 「医療 DX 令和ビジョン 2030」を理解し、医療 MaaS 構想への参画とエビデンスに基づく政策提言、
 5. 自治体・企業と連携した生活支援プラットフォームの構築、
- など多岐にわたる課題と解決策を提示する。

これらを遂行するためには政策リテラシーに加え、科学的思考力とデータサイエンス技能によって臨床価値を可視化する力が不可欠である。

本講演が、医療のデジタル化が進む時代において理学療法士がどのように成長し、生き残っていくべきかを共に考える機会となれば幸いである。